中務大輔源忠國ハ中務大
輔政長ノ子ナリ　政長ハ甲斐守政朝ノ子ニシテ円祝政勝ノ子トモアル
実ハ松平刑部大輔頼元ノ二男ナ
リ政長ノ養ハキテ子トナルハシ
メ小次郎ト云ヒ後年八郎政義ト
ノ改称ト名ノル延寶元年十一
月八歳ノ時ニテ初めて拝謁
ス同七年政長ノ遺領ヲ襲キ

陸奥國福島より移り十五百石を
領す同年十二月從五位下に叙
し天和二年二月まで播磨國
姫路に移さる同三年十二月從四
位下に叙し元禄十年二月侍從
に任ず寶永元年三月廿一日三
十九歳にして卒す

一 本多平八郎正武 後中務大輔に任ず 実は水戸
家松平刑部少輔頼元の次男なり
天和二年奥州福島より播州姫路
へ移封せらるるに家中諸士の風
俗なほ質朴なる中人皆その德
化を慕ひて流石水戸黄門公の学風
の餘光とそ見えし正武の居間の
四方に忠の字を額に書てかけ亜
起居に忘れしむるためかかけおく或

時張行せられし藥のそうてあ
るを見て科の次第を要し見て
糸巻と中付られ近習の士うけ行て
乗物より横て石帝をて書留来りて
見せしより中書つゝ見てきて
てこの者僉議いまゝ届すして
刑を行いれしい未熟なる事よと
獨言して通りきけるを近習の者
しも聞しらめて此罪人労味不足と
あるを合点まいらすと皆不審
しけきしも知きさるゆへ御時茶亭
にて横臥を見合せ問ひけきい中書
笑ひて深き子曾のあるゆへなし
罪科の書付を見きいむつゝ
入組たる科と見ゆるより罪人の月額
の給きいに得すれと人死刑より完り

一者ものも人の一命を取るもいと大切なるものなれい御宣なるも穿鑿吟味ととくへきる勿論なり拙きに月額の長き者なるも彼首の月額漸く四五日位のやうきなれい吟味のるもなりしと見えたり支ゆへなとそ不吟味なりしんとい云ひしそとゆきき大切なる

人の心へきは一言なて皆く感しけるきれい十五万石の民人大なる帰依しけるとなり

明良洪範
桃溪雑話

中務大輔義原忠良いはゝゆ
權次郎といふ後監物忠隆と稱
せり本多肥後守忠英の長男なり
元祿十四年十二歳よりてはゝ
めて法眼に寶永六年九月本多
中務大輔忠國の子吉十郎忠孝
初めて死し嗣子なきゆへ
先祖有功の家たるをもつて忠